

「令和3年度富山市中学校1年生学力調査」
結果の概要について

富山市教育委員会

「令和3年度富山市中学校1年生学力調査」結果の概要について

I 本調査の目的

- 各中学校が、1学年生徒の入学時の学力定着状況を把握し、今後の学力向上に向けた学習指導に生かす。
- 生徒一人一人が自分の努力すべき課題に向かって、意欲的に学習に取り組む。
- 各小学校は、卒業生の調査結果を踏まえ、学習指導の改善・充実を図る。

II 実施状況

- 実施期日 令和3年4月12日(月)、13日(火)
- 調査教科 国語、社会、数学、理科、英語
- 実施学校数・生徒数

実施学校数	生徒数	
27校 1分校 (附属中を含む)	在籍数	3,509人
	受検者数	3,427人 (5教科全てを受検した生徒数)

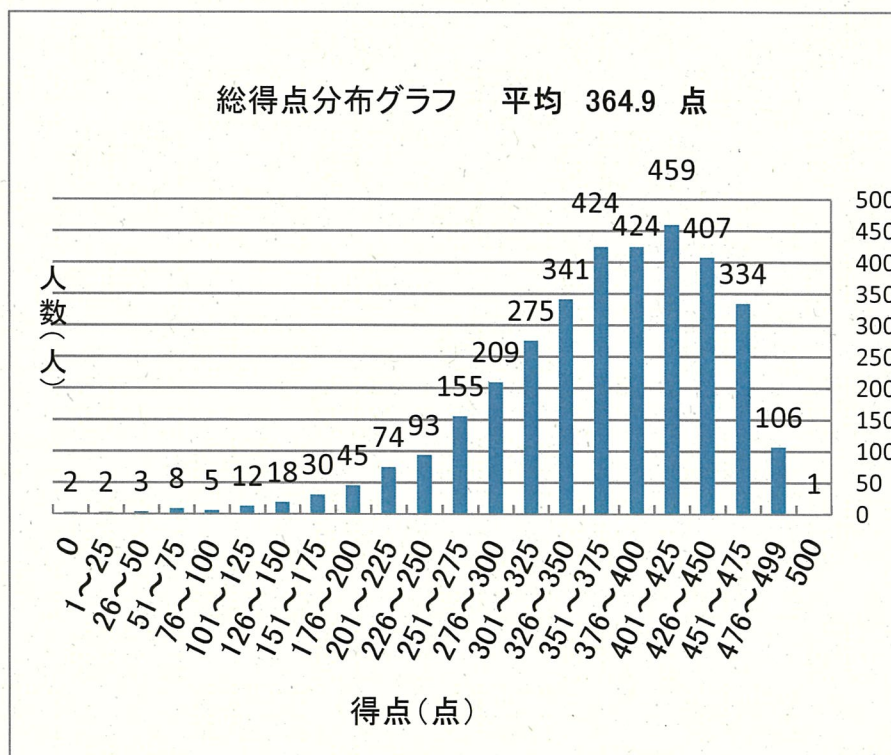
III 結果の概況(小数第2位で四捨五入しているため、計が100%にならない場合がある。)

1 教科別全生徒平均点

国語	社会	数学	理科	英語	5教科
76.7点	65.4点	65.6点	67.2点	89.5点	364.9点

2 総得点分布表・グラフ

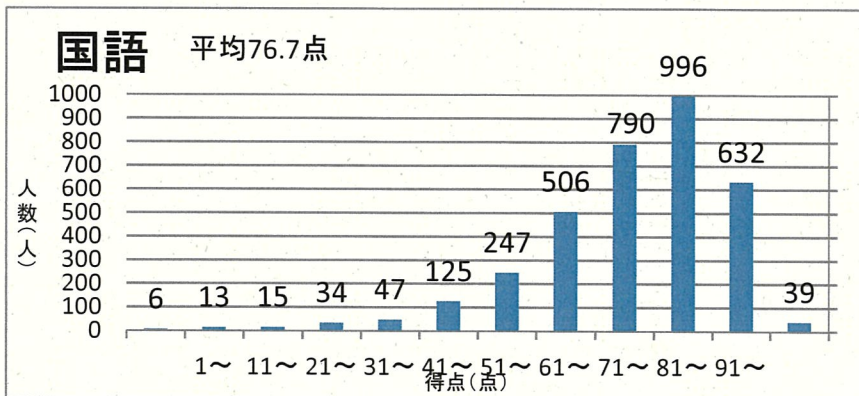
得点範囲	度数	%
500	1	0%
476~499	106	3.1%
451~475	334	9.7%
426~450	407	11.9%
401~425	459	13.4%
376~400	424	12.4%
351~375	424	12.4%
326~350	341	10.0%
301~325	275	8.0%
276~300	209	6.1%
251~275	155	4.5%
226~250	93	2.7%
201~225	74	2.2%
176~200	45	1.3%
151~175	30	0.9%
126~150	18	0.5%
101~125	12	0.4%
76~100	5	0.1%
51~75	8	0.2%
26~50	3	0.1%
1~25	2	0.1%
0	2	0.1%
計	3427	100.0%



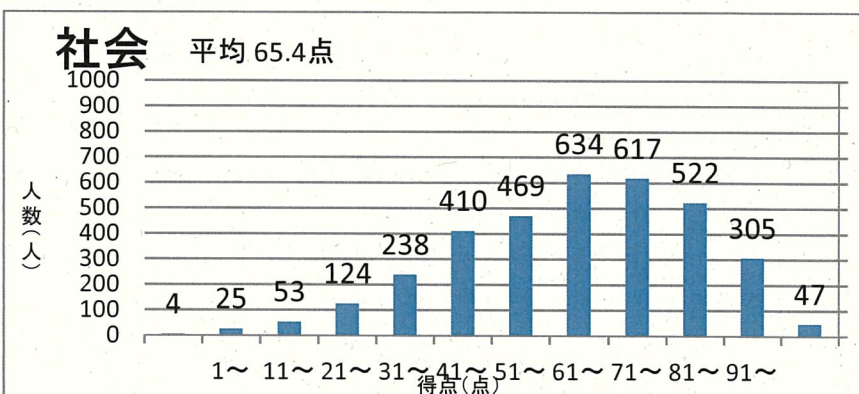
3 教科別得点分布表・グラフ

(小数第2位で四捨五入しているため、計が100%にならない場合がある。)

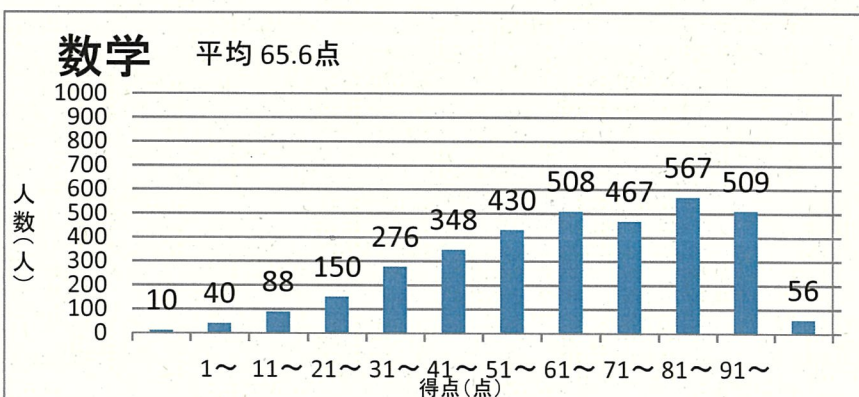
国語		
得点範囲	度数	%
100	39	1.1%
91~99	632	18.3%
81~90	996	28.9%
71~80	790	22.9%
61~70	506	14.7%
51~60	247	7.2%
41~50	125	3.6%
31~40	47	1.4%
21~30	34	1.0%
11~20	15	0.4%
1~10	13	0.4%
0	6	0.2%
計	3450	100.0%



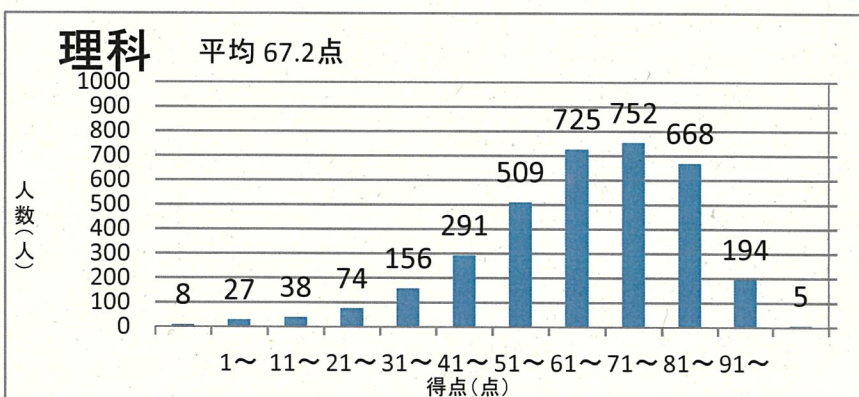
社会		
得点範囲	度数	%
100	47	1.4%
91~99	305	8.8%
81~90	522	15.1%
71~80	617	17.9%
61~70	634	18.4%
51~60	469	13.6%
41~50	410	11.9%
31~40	238	6.9%
21~30	124	3.6%
11~20	53	1.5%
1~10	25	0.7%
0	4	0.1%
計	3448	100.0%



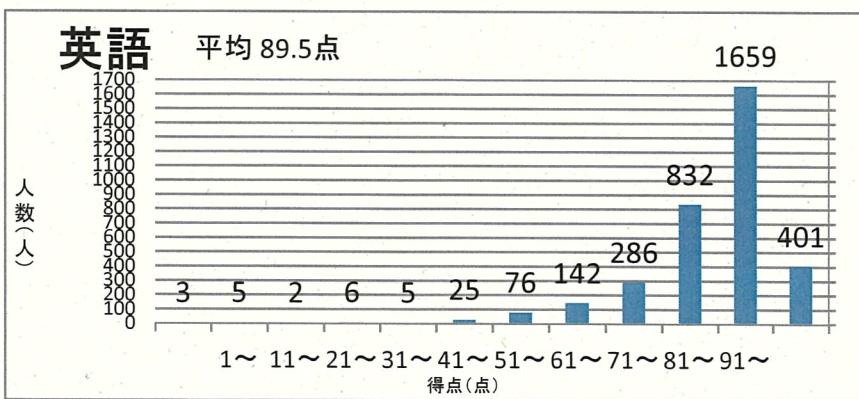
数学		
得点範囲	度数	%
100	56	1.6%
91~99	509	14.8%
81~90	567	16.4%
71~80	467	13.5%
61~70	508	14.7%
51~60	430	12.5%
41~50	348	10.1%
31~40	276	8.0%
21~30	150	4.3%
11~20	88	2.6%
1~10	40	1.2%
0	10	0.3%
計	3449	100.0%



理科		
得点範囲	度数	%
100	5	0.1%
91~99	194	5.6%
81~90	668	19.4%
71~80	752	21.8%
61~70	725	21.0%
51~60	509	14.8%
41~50	291	8.4%
31~40	156	4.5%
21~30	74	2.1%
11~20	38	1.1%
1~10	27	0.8%
0	8	0.2%
計	3447	100.0%



英語		
得点範囲	度数	%
100	401	11.7%
91~99	1659	48.2%
81~90	832	24.2%
71~80	286	8.3%
61~70	142	4.1%
51~60	76	2.2%
41~50	25	0.7%
31~40	5	0.1%
21~30	6	0.2%
11~20	2	0.1%
1~10	5	0.1%
0	3	0.1%
計	3442	100.0%



IV 結果の概要

1 抽出調査について

27 中学校の各学級 8 人（男子 4 名、女子 4 名）をそれぞれ出席番号の早い順に 1 番から 4 番までを抽出生徒の記録としてデータを取る。欠席の場合は、出席番号を繰り上げて、各クラスから 8 人の抽出を行うものとした。

2 抽出生徒数

学校数 学級数 抽出生徒数 27 校 100 学級 799 人（附属中含む）

V 各教科の概要

1 教科の考察

(1) 教科全体から見た結果

「得点分布表」「観点別解答率表」等から読み取れる教科全体の概要について、その特徴を表記する。

(2) 正答率の高い問題について

「設問別正答率表・グラフ」から読み取れる、正答率の高い問題について、考察を行う。

(3) 読解力と正答率の関連について

「設問別正答率表・グラフ」から読み取れる、正答率と読解力との関連について、実際の問題の一部を提示しながら考察を行う。

2 今後の指導

1 の(3)で考察した読解力の視点も含め、今後の指導の工夫について表記する。

VI 読解力の視点からの考察

1 読解力

文部科学省によると読解力とは、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、これに取り組むこと」と定義されている。一般的には、主語と述語の関係や、「それ」などの指示語が何を指しているのかなど、文章で表された情報を的確に理解する力である。また、「PISA 型読解力」とは、一般的な文字や文章といった「連続型テキスト」の理解だけでなく、グラフや図表、地図など様々な資料（「非連続型テキスト」）を理解し、利用し、熟考する力であるとされている。

2 読解力の視点からみえる課題

今回分析をした各教科における読解力を見る出題の正答率を比べてみると、次のようになる。

国語	社会	数学	理科	英語
55.2%	53.1%	53.6%	58.3%	82.5%

英語以外はいずれも 60%を下回っており、読解力の育成が重要な課題であることがよく分かる。教科それぞれの分析は、次頁以降に詳しく載せた。

全教科を通してみえてきた課題は、多くの情報の中から必要な内容を取捨選択して整理し、考えに生かすことにつまずきがあるということである。「ここで必要な情報は何か」という目的意識をもたずに資料に向かっているため、必要なこととそうでないことの判断ができなくなっていると考えられる。まずは、課題意識を明確にもつことが大切である。例えば「文の中の述語はどれか」「日本の食料自給率は低いのか」など、何に着眼して学習を進めればよいのかを明確にすることで、「文末にある言葉に着目する」「グラフで他の国と比較してみる」というように、必要な情報が何かが見えてくる。

3 読解力の向上に向けた今後の指導

○主体的な学びのある授業において

課題意識を明確にもって問題解決的な活動を繰り返すことにより、「今求めていることは何か」「自分が知りたいこと、考えたいことは何か」を確認しながら活動を進める習慣が身についていく。その上で情報を収集、整理・分析をすると、必要な情報や言葉を選ぶことができるようになる。加えて分かったことと未だ解決しないことがはっきりしてくるため、次の課題をみつけていくこともできるようになり、様々な資料を読解する力が育成され、生徒自らが主体的に学んでいくことが期待できる。

○「GIGAスクール構想」の実現とのつながり

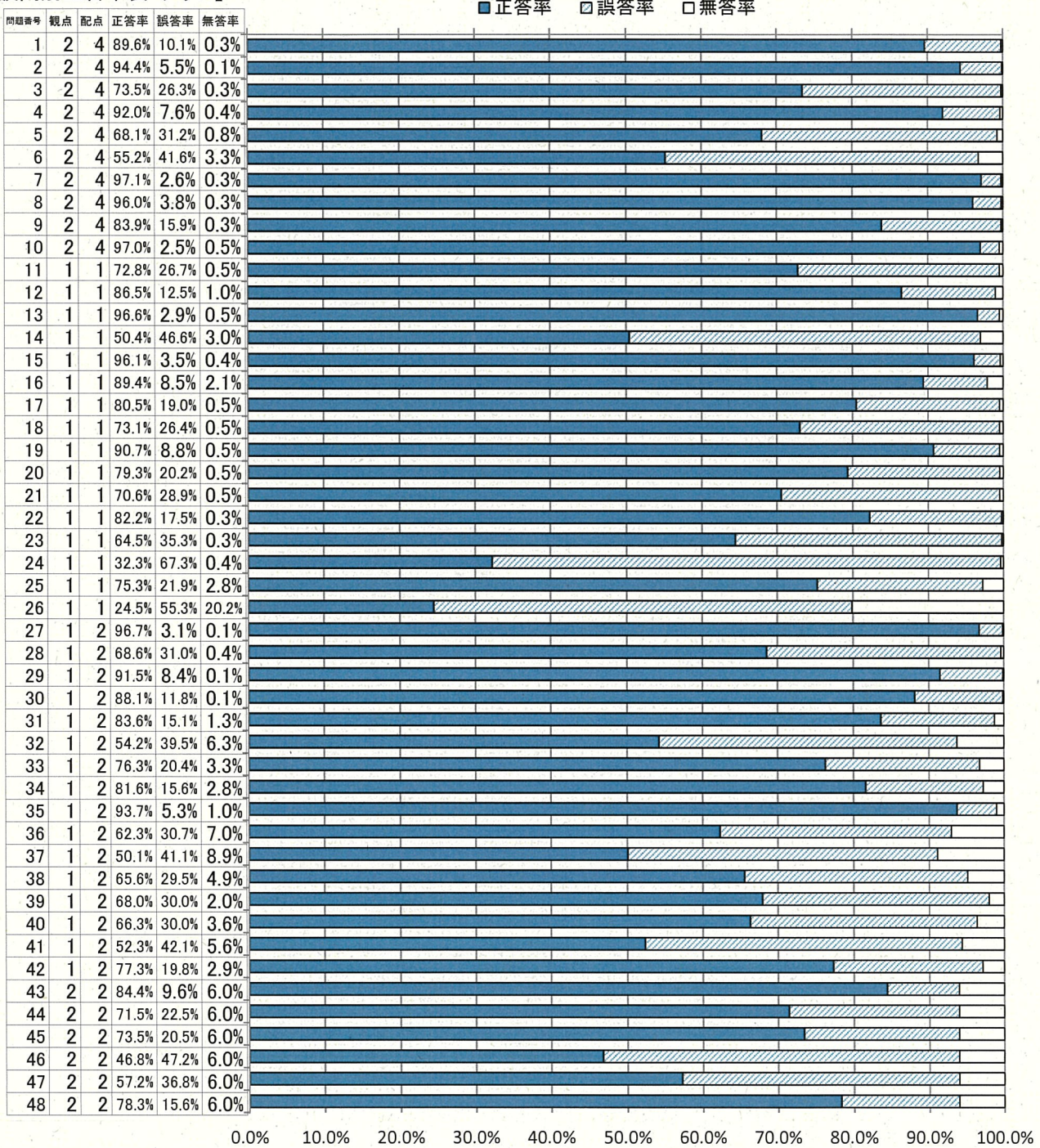
一人一台端末の活用により、多様で大量の情報の取り扱いが可能となる。しかし、前述したように多くの情報の中から必要な内容を選ぶ力が育っていないと、課題解決にはつながらない。キーワードを挙げて絞り込み検索をするなど、「今必要な情報は何か」を考えた上で情報端末に向かうことが大切である。また、情報収集、整理・分析をスムーズに進めるため、端末が「学習のために使う道具」となるよう、活用を進めることも必要である。授業改善を通して子どもの主体性及び情報活用能力を育成することで、ICTを活用した読解力の向上を図る。

Ⅶ 抽出生徒から分析する各教科の概要

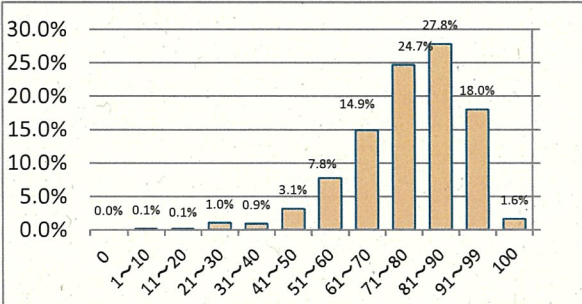
(小数第2位で四捨五入してあるため、正答率、誤答率、無答率の合計が100%にならない場合がある。)

国語 抽出生徒数 799人 抽出平均 77.3点

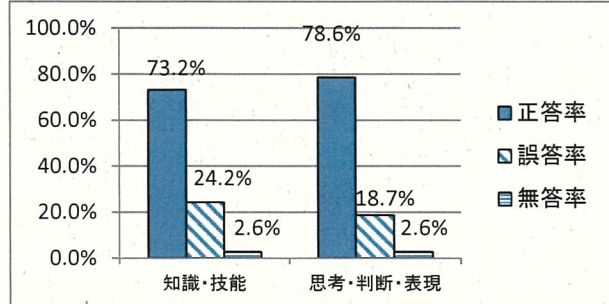
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



1 国語科の考察

(1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は77.3点であり、昨年度から15.5点高くなっている。観点別の正答率は「思考・判断・表現(78.6%)」より「知識・技能(73.2%)」が低く、「時を経る」の読みがな、「原因」の対義語、「聞く」の敬語(うかがう)等、語彙の豊かさが問われる問題の正答率が低かったためと考えられる。無答率は2.6%で、昨年度の4.5%から改善している。

(2) 正答率の高い問題について

「思考・判断・表現」を問う問題では、登場人物の心情を読み取り、正しい答えを選ぶ問題(通し番号2:しよんぼり、8:自分一人でやりたい、10:ぼくの成長を喜んでいることが伝わってきたから)の正答率が90%以上と高かった。文学的な文章において、叙述を根拠にしなが、文章の大意をとらえた内容にあてはまる選択肢を選ぶ力は身につけていると考えられる。

「知識・技能」を問う問題では、名詞の漢字の読み方を答える問題(通し番号13、15)の正答率が96%と高い。また、同音、同訓の漢字を選ぶ問題(通し番号27、29)の正答率も90%以上で、高い。漢字や句句に関する基礎知識はおおむね定着していると考えられるが、紛らわしい語(衛生)、送り仮名(快い)では正答率が50%前後であるため、幅広い語彙の習得が課題である。

(3) 読解力と正答率の関連について

文学的な文章の読解で、前述のように選択問題は正答率が高かったが、空欄に合わせて登場人物の驚きの理由を文中の語句で表す問題(通し番号6)の正答率が55.2%と低い。これは、驚きの根拠を示す叙述のまとまりや文脈をとらえて記述できなかったととらえられる。読んで理解した内容を正確に伝える力に課題がある。

(通し番号6)

②いちばんおどろいているのは、ぼく自身だとありますが、「ぼく」がおどろいているのはなぜですか。次の空欄に言葉を入れて、その理由の文を完成させましょう。

全然()ことを()から。

また、文の主語を選ぶ問題(通し番号24)の正答率が32.3%と低い。設問の文は複文であり、述語の主体に留意しながら読む力を身につけさせる必要がある。「が」が名詞についているという表面上の判断から「姉が」という語を主語と判断し選び、誤答となったことが考えられる。

(通し番号24)

次の文の主語として適切なものを、アからオの中から一つ選んで、その記号を書きましょう。

アあれは、私の姉が飼っている犬です。

過去、類似問題の正答率はほぼ同程度にとどまっているが、次に示すように徐々に上がってきている。形や位置にとらわれず、文章中の語句の役割を正しくとらえていくことが継続した課題である。

○あれは、/山田さんが/大切に/育てた/貴重な/花だ。 → (主語:「あれは」) 【正答率29.3%】R2実施

○これは、/去年の/夏休みに/ぼくが/描いた/絵だ。 → (主語:「これは」) 【正答率28.3%】H31実施

2 今後の授業に向けて

(1) 文学的な文章を扱う授業では、情景を想像して物語の内容を読み取るために、登場人物の心情の変化に着目して読むことが大切である。日々の授業で登場人物の心情を叙述から読み解くだけでなく、それを生徒が自分の言葉で改めてノートに書くなど、表現する学習も重要である。また、書き出し指定や空欄補充等、条件を設けて読み取った内容を書く活動も、叙述をより丁寧に読むために効果的である。その際、友達と読みの交流をし、ペア、グループ、クラス等、伝える対象や、対話、作文、メール等、伝える手段によって言葉を選ぶ活動に留意すると、語彙を豊かにすることにつながると考えられる。

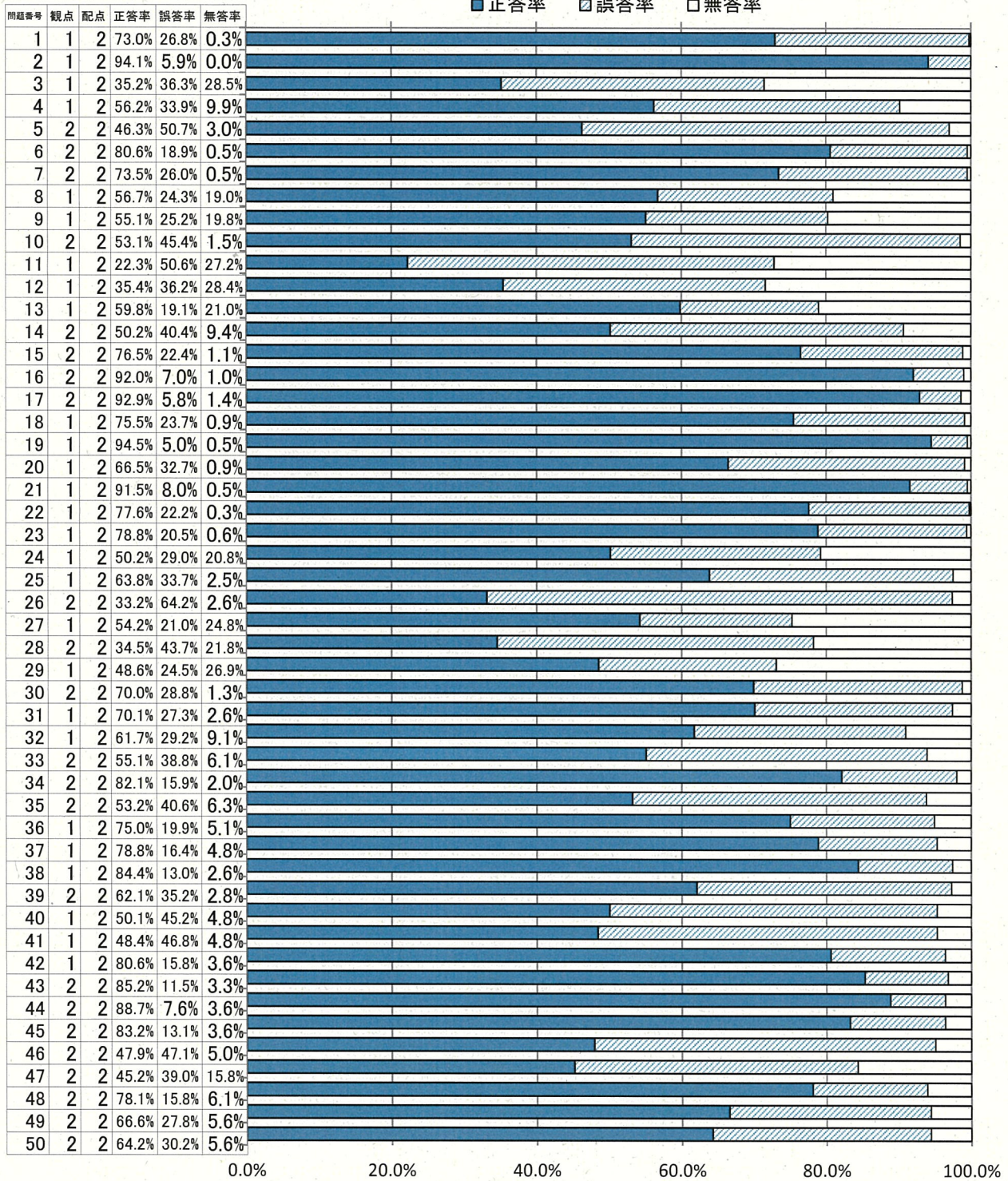
(2) 文章を正確に読解するためには、文の成分や、文節の係り受けを理解しながら読むことが必要となる。特に説明的な文章を扱う授業では、文章全体の構成、段落相互の関係をとらえるとともに、文の構造にも着目した学習を展開する。また、読解力を高める実践的な取り組みとして、一文がある程度長く、じっくり読み解く必要のある文章にふれ、生徒が内容を理解できているかを教師が確認するなどの機会を継続的に設けたい。教科書に掲載されている文章だけでなく、気になる時事問題に関する新聞記事を要約する活動や、図書室の書籍から関心のあるものを生徒自身が選び、その文章の一部を授業で扱うなど、読解力を高める読書活動へ広げることが、生徒の主体性を大切にしながら学習活動を進めることにつながる。

社会

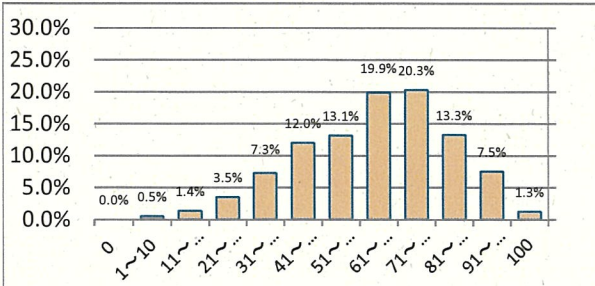
抽出生徒数 799人

抽出平均 65.04点

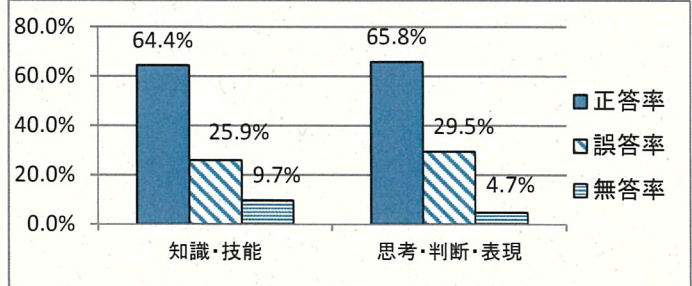
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



1 社会科の考察

(1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は65点である。観点別の正答率は「知識・技能」が64.4%、「思考・判断・表現」が65.8%と大きな差は見られない。

年表から原子爆弾が投下された時期を選択する問題の正答率が高い一方で、徳川家康・家光の政策を選択する問題や、江戸時代にオランダと中国だけに貿易を認めた理由を書く問題の正答率が低い。社会的事象を因果関係や時代背景を踏まえて理解する必要がある。

無答率が10%以上の問題が11問あり、昨年度（8問）より増加した。工業地帯・地域の名称や「北方領土」「富国強兵」「鎖国」等、語句を答える問題の無答率が高い。また、記述式の問題の無答率が高く、知識の確実な習得が求められる。

(2) 正答率の高い問題について

「知識・技能」を問う問題では、日本の周りがある海洋の名称や、その時代の代表的な文化遺産を選択する問題（通し番号2、19、21）の正答率が90%以上と高かった。また、グラフから富山港線の利用者数や、利用者の割合を読み取る問題（通し番号38）の正答率が高かった。資料から数値を正しく読み取る力が定着している。

「思考・判断・表現」を問う問題では、放送局や医療現場における情報活用の事例を判断する問題、日本国憲法の三原則と関係がある国民生活の事例を選択する問題（通し番号16、17、43、44、45）の正答率が高かった。社会的事象を身近な生活と関連づける力がついていると考えられる。

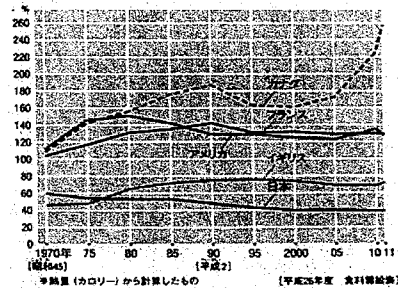
(3) 読解力と正答率の関連について

グラフから食料自給率や米の生産量と消費量、農業人口を読み取って、日本の食糧生産の変化や現状を考える問題（通し番号10）は、正答率が53.1%と低かった。米の生産量と消費量のグラフから、双方が減少し続けているという事実をとらえるとともに、米の生産量と農業人口の変化を比較し、一人あたりの生産量が増加していることを判断して選択する出題であったが、誤答率が45.4%であった。問われていることの正誤を判断する際、資料を選び、そこに書かれている事象の意味を理解した上で、複数の資料を比較・関連づけて読み解くことに課題がある。

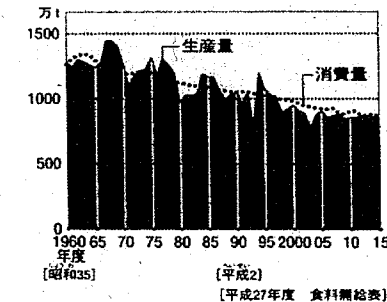
(通し番号10)

(3) 下の【資料1、2、3】をもとに説明したア～ウの文の中から、まちがっているものを1つ選びましょう。

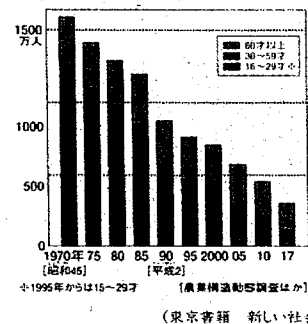
【資料1】日本と主な国の食料自給率



【資料2】米の生産量と消費量の変化



【資料3】農業で働く人数の変化



ア 日本の食料自給率は、40%より低くなっているので、多くの食料を輸入に頼っている。

イ 55年ほど前から、米の生産量が消費量を上回るようになったので、米の生産量を増やすようになった。

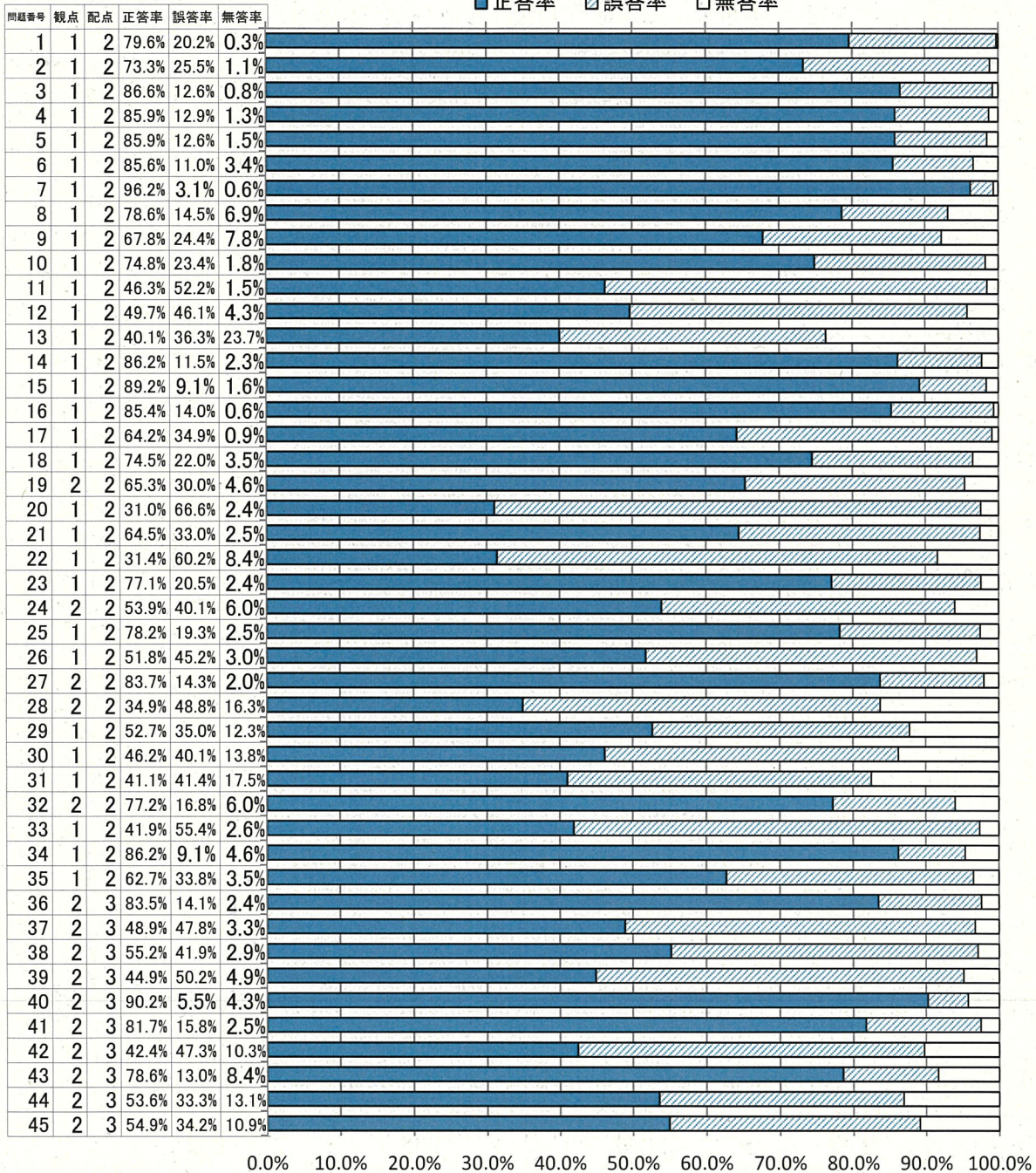
ウ 年々、農業で働く人は減少しており、高齢化が進んでいるが、一人あたりの生産量は、増加している。

2 今後の授業に向けて

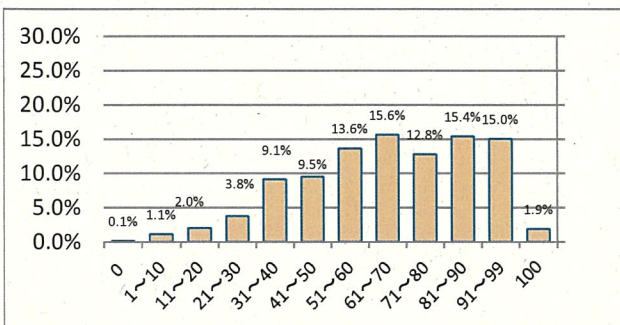
(1) 知識・技能を確実に習得するために、例えば工業の学習では、「工業が盛んな地域はどこか」「なぜ中京工業地帯は日本で最も生産額が高いのか」といった課題を設定し、まずは自分なりの仮説をもつことが必要である。資料集や本、インターネットを活用して自分の仮説を確かめるための情報を集め、集めた資料から分かったことや考えたことをもとに、一人一人がまとめを書いたり仲間に話したりする時間を設けることで、確かな知識の定着を図っていくことが求められる。

(2) 課題意識を高め、深い理解ができるようにするためには、当事者意識をもつことが重要である。例えば、歴史上の施策を考える際に大日本帝国憲法と、日本国憲法を並べてみたり、現代社会の諸問題等を考える際に大雨に見舞われた他地域と富山の写真を比べてみたりするなど、提示資料に身近に感じられるものを入れる工夫をする。その上で資料からどのような考えをもったか仲間と考えを交流する機会を設けることで、一つの事象を多面的・多角的に考えられるようになる。

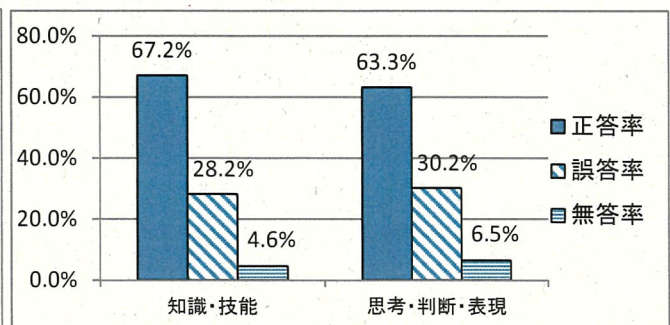
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



1 数学科の考察

(1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は、65.6点であり、昨年度より0.6点低くなっている。観点別では「知識・理解」の正答率が67.2%、「思考・判断・表現」の正答率は63.3%であった。領域別に正答率を比較すると、「数と式」が79.4%、「図形」が63.2%、「データの活用」が60.7%であったのに対し「変化と関係」は57.8%と60%を下回っている。また、無答率を比較しても「変化と関係」は8.8%と他の領域の無答率の2倍以上になっており、「変化と関係」の領域の学習に課題が見られる。

(2) 正答率の高い問題について

小数を相対的にとらえる問題（通し番号7）、伴って変わる二つの数量を表に表す問題（通し番号40）では、正答率が90%を超えている。また、分数を用いた四則計算では問題4問すべてが正答率85%を超え、四則に関して成り立つ性質のうち分配法則を用いる計算においても正答率が86.2%である。このことから基礎的な計算能力は概ね定着していると考えられる。

(3) 読解力と正答率の関連について

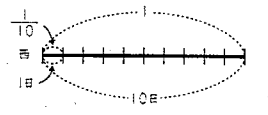
二人の子どもの会話文と数直線を手がかりにして、橋の完成までの日数を考える問題（通し番号44、45）において「数直線が何を表すのか」を読解することに課題が見られた。異なる仕事量を足し合わせる問題（通し番号44）では正答率は53.6%、橋が完成するまでの日数を求める問題（通し番号45）では54.9%と、同程度の低い正答率であった。文章や数直線を正確に読み取り、式で表現することができず、通し番号44でつまずき、通し番号45の誤答にもつながったことが予想される。文章で何が課題として取り上げられているかを理解し、図に位置づけるような力に課題がある。

(通し番号44、45)

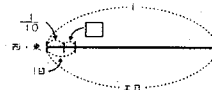
(18) ある橋を西側と東側から建設することを計画しています。西側からの工事は10日、東側からの工事では15日かかります。西側、東側同時に工事すると、この橋を完成させるには何日かかるかを考えます。



なるほど!!
橋の長さを1とすると、西側からは10日で完成するから、1日では全体の $\frac{1}{10}$ だけできるね。



(2) 西側、東側から同時に工事すると、1日で全体のどれだけ完成しますか。

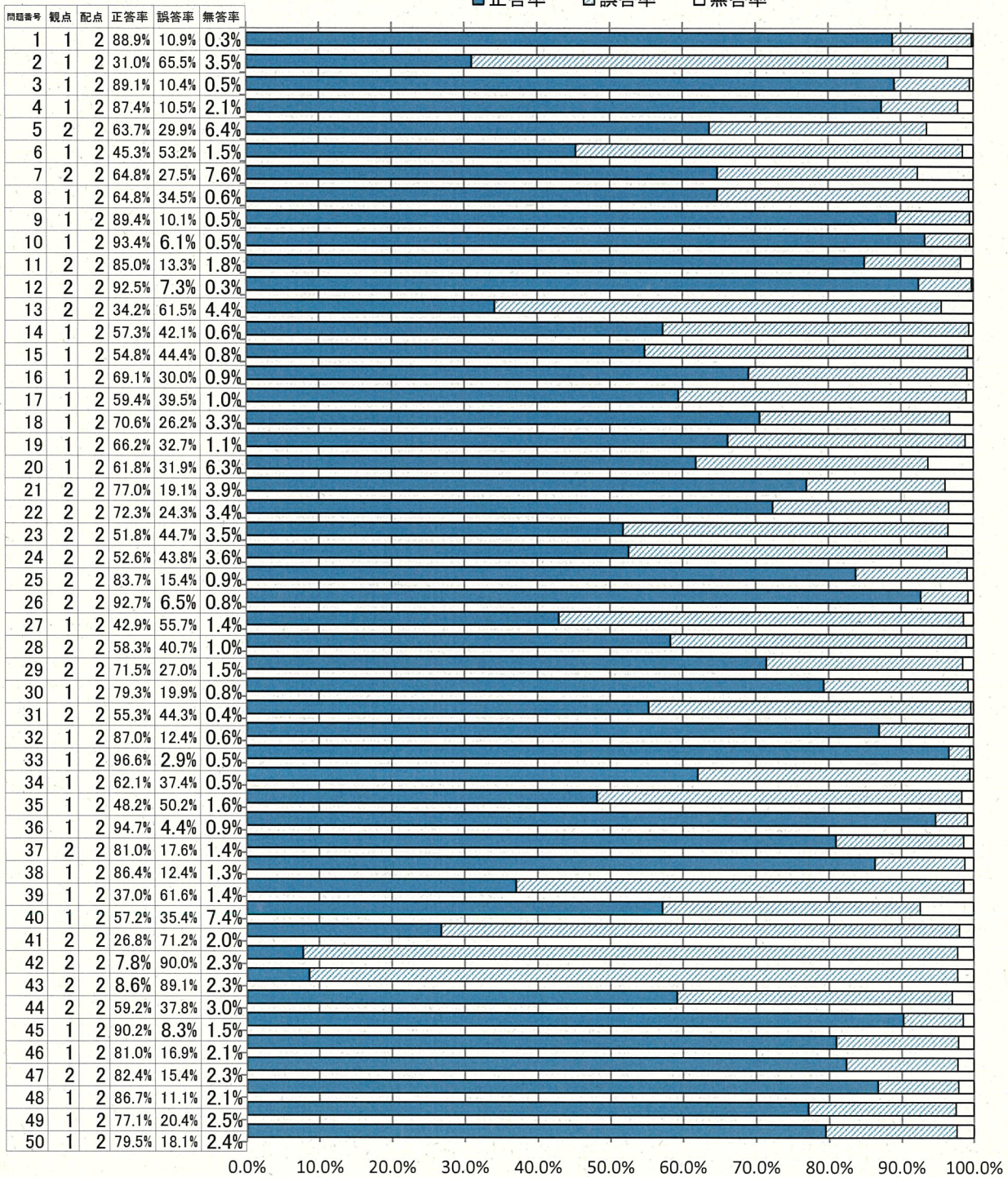


(3) 西側、東側から同時に工事をすると、この橋を全て完成するのに何日かかりますか。

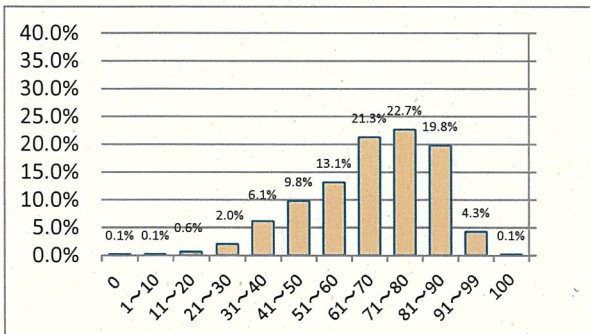
2 今後の授業に向けて

- 文章や図から適切に情報を読み取る力を養うためには、会話文や図、表等の様々な資料を用いて学習課題を提示したり、読み取ったことを図や表で表現したりする活動が効果的である。また生徒が表現したものを互いに交流する場を設定することで、多様な考え方や表現方法にふれることができるため、「なるほどそんな考え方もあるのか」「わたしとは〇〇が違うな」など生徒自身が自らの考えを振り返る機会となる。そうした活動を繰り返すことで、資料を読み取る力とともに、自分の考えを深め、表現する力も高めていくことができる。
- 「変化と関係」の領域の学習を定着させるためには、具体的な場面を設定し、伴って変化する数の様子を表、式、グラフを用いて表したり、その変化の特徴を読み取って友達に伝えたりする学習を取り入れることが肝要である。その際、例えば「30分間でお風呂に入る水の量がどのように変化するか」などを始めに、具体的場面における複数の事例をとり上げ、「伴って変わる」とはどのようなことなのかを実感できるようにすることで、一般化につなげる。また、「図や表を見て分かることをいくつ見つけられるか」と課題を提示する際に目標を設定するなど、個人の考えを深める時間を確保し、表を横の数字の変化だけでなく縦の数字の関係で比較するなど、多様な考えを生むことにつなげ、関数への見方を広げることができるようにする。

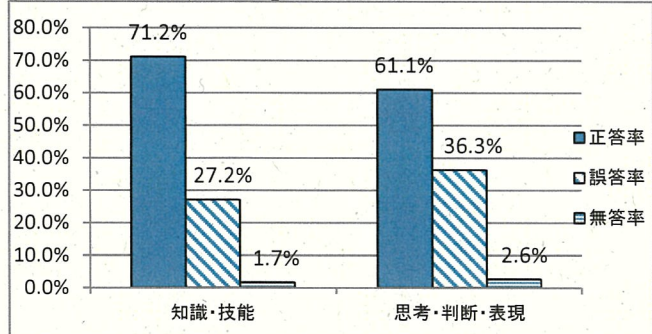
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



1 理科の考察

(1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は 67.1 点であり、昨年度より 5 点低くなっている。観点別の正答率は「観察・実験の知識・技能」が 71.2%、「思考力・判断力・表現力」は 61.1%であった。無答率が 6%を越えた問題は 4 問（問題数全体の 8%）であり、昨年度の 1 問より増加した。そのうちの 3 問は自然の事物・現象に対して影響を与える要因や、見いだした問題を解決する方法について説明する問題であった。

(2) 正答率の高い問題について

自然の事物・現象の性質等を理解しているかをみる問題（通し番号 10、33、36）は 90%以上の正答率であった。また、雲画像とアメダスの情報から天気の変化をとらえる問題（通し番号 12）、空気の入れ替わりとろうそくの燃焼時間との関係をとらえる問題（通し番号 26）の正答率も 90%を超えており、観察や実験を通して得られた結果と生活経験や知識等を関連づけて現象の変化をとらえる力がついていると考えられる。

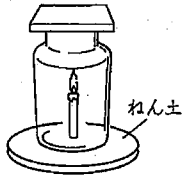
(3) 読解力と正答率との関連について

上記のように空気の入れ替わりとろうそくの燃焼時間との関係をとらえて回答を選択する問題の正答率は高かったが、ろうそくの火が消える原因について予想した文を読んで、その考えに合うモデル図を選ぶ問題（通し番号 28）の正答率は 58.3%と低かった。この問題では、「ろうそくが燃える前の空気のモデル図」から、記号が示す気体の名称と割合を読み取り、「酸素が全て使われる」「二酸化炭素に変わる」というキーワードから、「ろうそくが消えた後の空気のモデル図」を予想する力が求められる。複数の図表やグラフ、モデル図等を目的に応じて整理し、予想した結果について考察する力に課題があると考えられる。

(通し番号 28)

(2) アで、ろうそくの火が消える原因を、太郎さんは、ろうそくが燃える前と燃えた後で空気がどのように変化したが注目して予想しています。

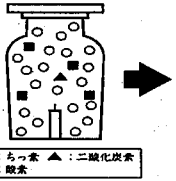
ア



集気びんの上と下を閉じる。

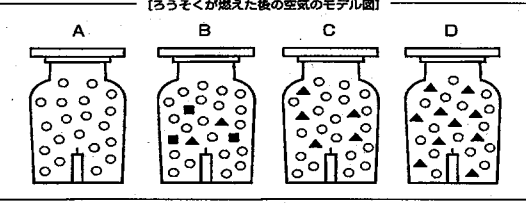
太郎さんの予想：ろうそくの火が消えたのは、集気びんの中の酸素が全て使われて、二酸化炭素に変わったからだと思うよ。

〔ろうそくが燃える前の空気のモデル図〕



○：酸素 ▲：二酸化炭素
■：窒素

〔ろうそくが燃えた後の空気のモデル図〕



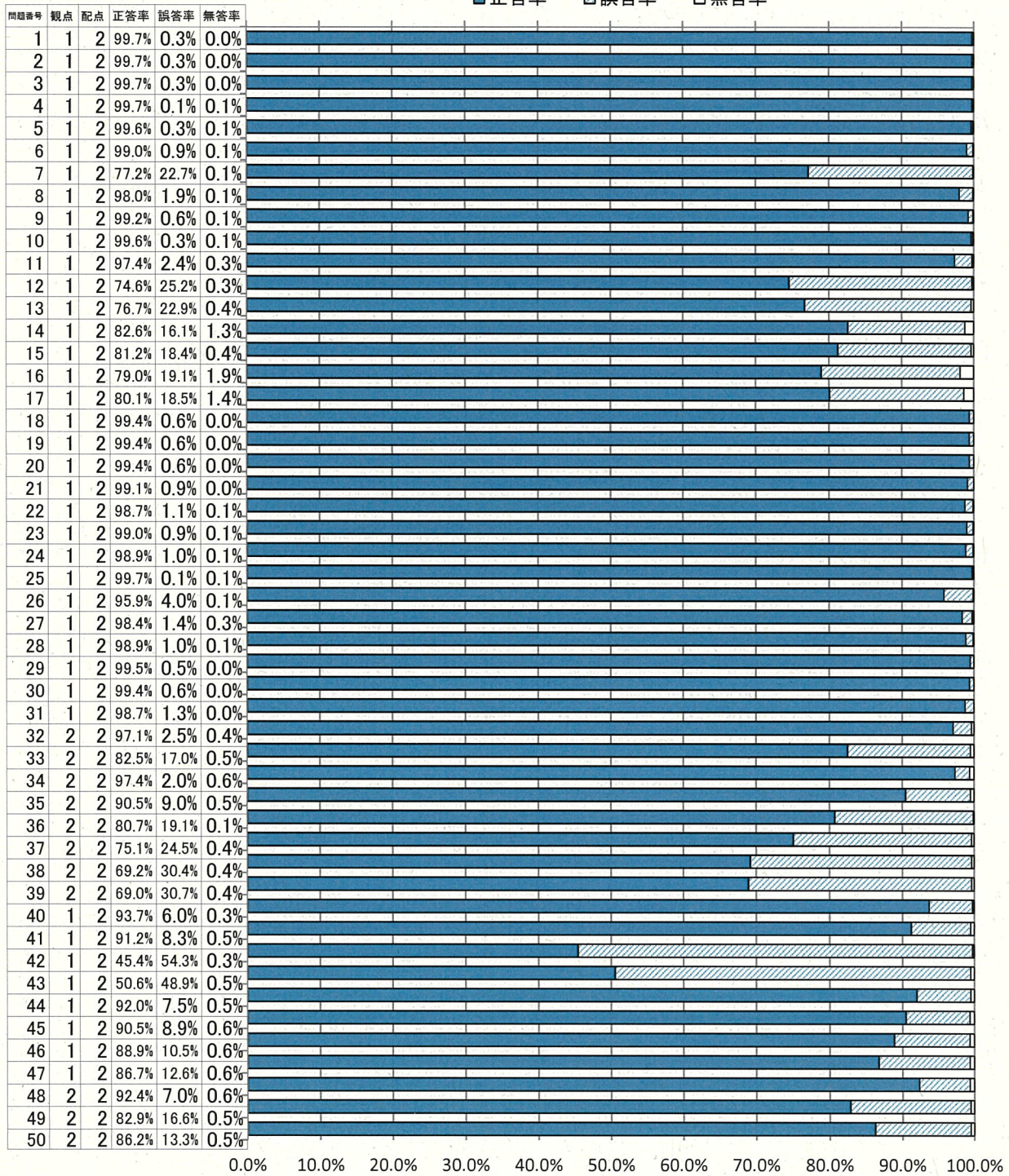
① 太郎さんの予想に合うモデル図を、A～Dから1つ選んで、記号で答えましょう。

2 今後の授業に向けて

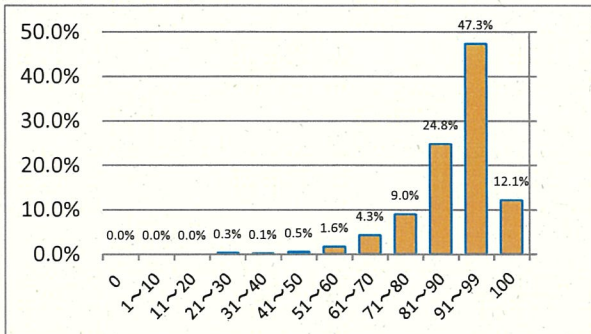
(1) 自然の事物・現象に影響を与える要因や、見いだした問題を解決する方法について説明する力を養うために、「空気でっぼうはどうすればもっと飛ぶのだろう」など、生徒が解決したい、要因を探りたいと願う現象に出会う場を意図的につくる。それに加え、見いだした問題に対して予想や仮説をもち、確かめるための観察、実験の方法を発想する学習過程を大切にしたい。さらに、グループ学習等によって相互に情報交換する場を設定することにより、自分の考えをより妥当性のあるものにしていくことができる。

(2) 図表やグラフ、モデル図等を用いて予想したことや考察したことを整理し、説明する力を養うには、まず「何のために（目的）、何に注目して（視点）、どのように（記号等の具体）」を明確にすることが大切である。それらをもとにしながら、生徒同士の考えを比較したり、現象の変化を比較したりするなどして考察する学習活動を大切にしたい。

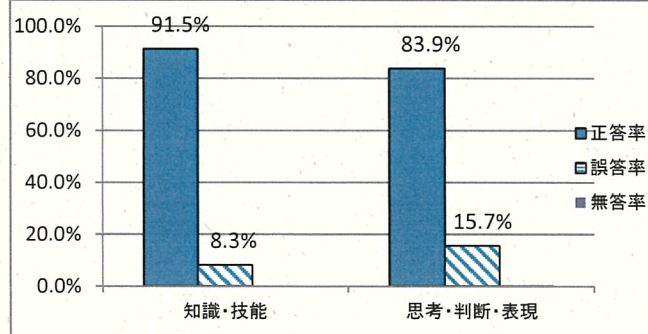
【設問別正答率表・グラフ】



【得点分布グラフ】



【観点別の解答率グラフ】



1 英語科の考察

(1) 教科全体から見た結果

抽出平均点は 89.8 点であり、受検者のうち約 60% が 91 点以上であった。また、50 問中、無答率が 1% を超えたのは 2 問（通し番号 16、17）のみであった。観点別で見ると、「知識・技能」の正答率が 91.5% に対し、「思考・判断・表現」の正答率が 83.9% と約 8% 低くなっている。

(2) 正答率の高い問題について



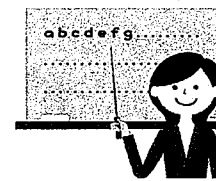
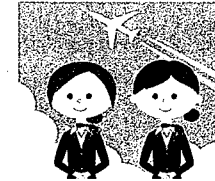
「知識・技能」（全 39 問）に関する問題では、英単語の意味の確認（通し番号 1～5）やアルファベットの聞き取り（通し番号 8～11）、場面に応じた適切な挨拶文の聞き取り（通し番号 18～20）、自己紹介文の聞き取り（通し番号 21～24）、宝物の紹介文の聞き取り（通し番号 25～31）の正答率が 9 割を超えた。

「思考・判断・表現」（全 11 問）に関する問題では、英単語の意味をイラストから選ぶ問題（通し番号 40、41）、場面や状況によってどの英文を使うか選ぶ問題（通し番号 44、45）、文構造を問う語句の並べ替え問題（通し番号 48）の正答率が 9 割を超えた。

(3) 読解力と正答率の関連について

(10) ゆきとトムが将来の夢について話しています。下の(1)、(3)には、それぞれの夢を下のア～エの中から選んで、記号で答えましょう。また(2)、(4)には、それぞれ日本語を書き入れ、理由を完成させましょう。

	しょうらい 将来の夢	その理由
ト ム	(1)	(2) ()がすきだから
ゆ き	(3)	(4) ()がすきだから

ア	イ	ウ	エ
			

「将来の夢となりたい理由」についての対話を聞き、夢をイラストから選んで記号で答え（通し番号 32、34）、その理由を日本語で答える問題（通し番号 33、35）では、それぞれの正答率が 97.1%、97.4%、82.5%、90.5% であった。英短文の内容を把握するための語彙力や文構造を理解する力など、基礎的な力が身につけていると考えられる。

2 今後の授業に向けて

- (1) 小学校の外国語活動・外国語科では、コミュニケーション活動が主体となっており、アルファベットや英単語の定着を図るために、音声と文字とを関連づけて指導することが重要である。その際、音声で慣れ親しんだ文字や語句等を書き写す活動を取り入れるとともに、単語と意味の関連づけを行うことが大切である。また、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを意識した活動を行い、それぞれに合わせてどう問うか、どう答えるかを整理する学習を行う。そして、具体的なコミュニケーションの場を設定することで、言語材料の定着を図る機会を確保する。
- (2) 「思考力、判断力、表現力等」を育成するために、まずは身近で簡単な事項についての英語を聞いたり読んだりする機会を通して、英語のリズムに慣れ親しませることが重要である。それから、理解した内容を基に自らの体験や考え等を英語で伝え合う活動を積極的に取り入れることで、生徒が自分の表現に自信がもてるようになることを目指す。
- (3) 「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」を養うために、スポーツ、音楽、学校行事、休日の計画といった生徒が共通して関心をもつ身近な事柄を単元構想に取り入れ、簡単な語句や基本的な表現を用いて自分の考えを伝え合うといった自己表現活動を工夫する。また、実際のコミュニケーションの場面において、生徒が楽しみながら英語に慣れ親しめるような言語活動を展開することで、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。